

年次大会 講演要旨 (令和四年十一月十一日)

日本語オノマトペの特質

小野 正弘

オノマトペとは、「擬音語」と「擬態語」の総称である。日本語オノマトペの特質として、まず挙げられるのは、短い言葉で、複雑かつ微妙な概念を表すことができることである。たとえば、「ガヤガヤ」というオノマトペを、普通の言葉を連ねて言えば、「多くのひとびとが、ひとつの場所で、めいめい小さな集団を作って話し合っている音」のようになるが、こんな長い説明を、「ガヤガヤ」だけで表し、しかも、それで適確に伝達できることは、大きな特質と言つてよい。

次に、日本語オノマトペの場合、ある基本要素をもとにして、さまざまな成分を加えて、細かなニュアンスを出すことができることが挙げられる。例えば、「カチ」という要素をもとにして、瞬間的な「カチッ」、余韻のある「カチン」、ひとまとまりの「カチリ」、繰り返す「カチカチ」などを造ることができる。日本語オノマトペの場合、基本要素は、理論的には、二万弱形成でき、それをもとにしたオノマトペは、二十三万程度想定できるが、現実に使われているのは、五千程度であり、ごく一部である。日本語オノマトペの可能性は、まだまだ大きく残されていると言える。

(おの・まさひろ、明治大学文学部教授)

年次大会 発表要旨 (令和四年十一月十一日)

『伊勢物語』における「色好み」について

— 語られた〈男〉と〈女〉 —

彭 健

『伊勢物語』はしばしば「みやび」の文学と言われているが、「色好み」も作品を特徴づける重要な用語である。主人公「昔男」は「色好みの人」と呼ばれ、多彩な「色好み」の物語が集められ語られる。通行本『伊勢物語』に「色好み」の用例は合計七章段八例があり、それぞれ「女」の「色好み」四章段(二五段、二八段、三七段、四二段)、「男」の「色好み」三章段(三九、五八、六一)である。『伊勢物語』の主要な注釈書をひいてみると、『新編日本古典文学全集』(小学館)では、「恋の情趣を甚だ好む」、「恋の情趣を解し情事を好む」と解釈し、『新日本古典文学大系』(岩波書店)では、「恋の風情をたのしむ」、「恋の情趣を求め憧れる」と解釈する。しかし、『伊勢物語』以前の「色好み」の用例を検討してみると、「色好み」の持つ「負」のイメージを看過できない。その延長線上にある『伊勢物語』の「色好み」を、果たして、このような「美的概念」、「風雅」、「風流」などの基準で一義的に解釈していく方がよいのか、なお論じる余地があると思われる。

本発表では、「色好み」というキーワードが使われる章段を取り上げ、物語に語られたそれぞれのコンテキストにおける「色好み」の解釈を考え直した。その際に、「色好み」章段における「女」

と「男」の関係を注目し、「色好み」が、語られる内容や「男女」の差異による物語の多様性を示す動的ダイナミズムであることを明らかにした。

(PENG・JIAN 名古屋大学大学院人文学研究科  
人文学専攻博士前期課程)

### 『古事記』における姉妹が示す〈少女〉像

レッカ ゴカレ

『古事記』上巻における伊邪那美（いざなみ）、石長比売（いわながひめ）、木花之佐久夜毘売（このはなのさくやびめ）、豊玉毘売（とよたまびめ）と玉依毘売（たまよりびめ）五柱の女神の〈少女〉像を取り上げた。上代語の〈少女〉に相当する「をとめ」「をみな」の語義を分析しつつ、「をとめ」「をみな」と表記される伊邪那美が示す〈少女〉の多様な要素が、岩長比売・木花之佐久夜毘売姉妹と豊玉毘売・玉依毘売姉妹に分解して描かれたと解析した。これまで、『古事記』における〈少女〉像は、折口信夫が、「水の女」という視点で、「水の精霊」として「禊ぎの奉仕」にあたる「神女」という巫女性性の側面から述べたり、清水茂雄が、死から再生を促す存在として「伊邪那美」を扱ったりするなどして、個別的、部分的にしか扱われてこなかった。本稿では、作品全体の機構と建國神話というテーマに照らして、複数の女神たちに共通する豊穰性、智性、呪術性といった総合的な側面から、『古事記』

上巻における〈少女〉像は、結びの神としての母性を備えつつ、平和と繁栄を導く巫女性を示すと考察した。

(GOKHALE・REKHA 創価大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士前期課程)

### 近代の〈少女〉像

——川端康成の少女小説を中心に——

伊藤 輝

本発表では、はじめに近代における〈少女〉の定義や恋愛観、家庭観について触れつつ、少女雑誌の特徴および女子中等教育制度の確立、そして川端と少女雑誌の関係性などについて整理した。その上で、川端が『少女の友』に連載した八つの作品における〈少女〉像を、作品の内容及び挿絵から分析した。

先行研究では『少女の友』が読者と編集者の共同作業により〈少女〉像を作り上げていったことが明らかとなっている。この事實は、現実社会の〈少女〉と、作品に描かれる〈少女〉像が雑誌を通じて密接に結びついていた可能性を示唆するものである。

そのような特徴を有する雑誌で、川端は心性の美しさ（清らかさや純粹さ）を有する〈少女〉像を描いている。加えて、中原淳一の挿絵を伴うことによって、結婚や労働とは無関係の空間において、愛される存在ではなく、愛する存在としての〈少女〉像を提示している。すなわち、近代の現実社会における「異性愛」

男性の相補者」としての〈少女〉とは異なる〈少女〉像を描いているのである。

川端がこのような〈少女〉像を描いたことの意義、そして文学と人間、社会の結びつきについて「近代の〈少女〉像」というテーマを通して考察した。

(いとう・ひかる、創価大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士前期課程)

平成〈遊戯文芸〉三〇年史

—— 娯楽小説に於ける〈少女〉像の変遷の

歩み——

堤 拓夢

平成への時代転換は、メディアの急速な発達と共に、イデオロギーという〈大きな物語〉に依存する時代から、不安定な〈個人の内実を問う時代への転換が余儀なくされた時代だ。本発表では、社会と個人の狭間の中で揺れ動く価値観の一つである〈少女〉を手掛かりに、平成三〇年間に若年層の間で教養化されつつあった二次元世界における〈少女〉像の変遷に対する考察を行った。

九〇年代に「アニメ・マンガ・ゲームの感性を軸に据えた若年層向け小説」として出発した「ライトノベル」は『スレイヤーズ』を代表に、キャラクターの〈外見〉・〈内面〉・〈性格〉・〈立場〉等を「記号的な属性」として置換しながら消費する構造を有して

おり、〈渴望を叶える少女〉が描かれる〈少女〉の対象となっていた。

ゼロ年代ではインターネットの発達と重なり、『ゼロの使い魔』・『灼眼のシャナ』のように新しい属性の構築と置換が試みられるようになる。「ツンデレ」というアーキタイプが構築されたのも同時期であり、〈少女〉は「萌え」の対象へ転じた。その一方で、イチゼロ年代へ入るとスマホとSNSの普及もあり、『ひげを剃る。そして女子高生を拾う。』のように、社会人から見た等身大の〈少女〉へと対象が移る。

十年刻みで見ると社会現実を下地とした代替消費の傾向が強まっており、少年少女時代という「失われた栄光」に対する希求性の強さが垣間見える。しかし、現在〈少女〉とされる年代層は置き去りになっている実態が存在する。社会の〈いま・ここ〉を反映した若年層の読み物として、今後も注視し続けるべき対象だと結論付けた。

(つつみ・たくむ、創価大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士前期課程)